

さざなみ 国語教室

さざなみ国語教室

第518号 2025年 5月25日

発行者代表 吉 永 幸 司

連絡先 大津市柳川2-11-5

TEL 077-522-1008

発行所 滋賀児童文化協会

NPO 現代の教育問題研究所

三十九年めの壁

石川 雅春

「ああ、うまくいかない」、「次回の授業も憂鬱だなあ」。久しぶりにそんな感情に襲われる。

公立の小中学校に三十八年勤務し、今年度より私は大学で教師の卵を育てることにやり甲斐をもって取り組んでいる。その一方で悪戦苦闘の日々が続いていることがある。それは定時制高校の非常勤講師として行っている「現代文」の授業である。これまでの国語教師としての経験を生かし、外国籍児童生徒の役に立ちたい、心を通わせたいと思い、外国籍の割合が高い定時制高校を自ら志願して飛び込んだ。それが現在は冒頭のような状況である。

一学級の約八割が日本語を母語とせず育ってきている生徒。日常会話はできるが、漱石や子規、教科書中の論説文を読み取るのは不可能に近い子がほとんどだ。すべてに読み仮名が必要な子もいる。その一方で、約二割の日本語を母語として育った子の中には、本ばかり読んでいた子もいる。したがって、読解力の差が極端に激しい。

授業妨害までする子はさすがにいないが、天井をポルトガル語が飛び交ったり、始まってすぐに机に伏せて寝てしまったり。指名しても「わからない」ばかり。話し合いは成立せず、どうしてもプリント学習が中心となる。日本語能力に応じて三種類のプリントを作

成し進めているが、反応は鈍く効果が感じられない。「自由進度学習」や「同時異学習」という言葉が頭をよぎる。模索する日々である。

しかし、話し言葉に耳を澄ますと、片言の日本語に温かさが詰まっている。たとえば、教室移動の際には「先生、じゃあね」「荷物を持とうか」と言ってくれる。世間での耳をふさぎたくなるような批判的な言葉は聞いたことがない。

そんな中、「油を売る」という慣用句だけはしっかりと覚えた生徒がいる。この意味を学習した際、「先生、これ仕事で使える？」と聞いてきた。昼間の仕事の中に、おしゃべりをする店員を気にしていたのだろう。「油を売るのはよくないよ、と使ってみたら」と話すと、時折その言葉を職場で使ったようで、テストでも唯一の正解を得られた。「教科の論理」より「生活の論理」か。多文化共生の社会を目指す中での国語教育について考えさせられることばかりである。

授業で油を売るわけにはいかないが、「油が切れる」ことのないように、心をみずみずしく保ち、この壁をジャンプしたい。

(名古屋学芸大学特任教授)

サザナミ

▼コミュニケーションを図る資質・能力を育成するため、ディベートを国語科授業で指導するようになって久しい。自分の意見を認めてもらうために相手の意見を否定し、論理的に説明する力として成果をあげてきた言語活動である。学習用語として「論破」を使うこともある。

▼最近、「はい、論破？」だの「それってあなたの感想ですよね？」と、小学生に言われたというのを耳にする。小学生の流行語ランキングでも上位にランクしているということなので、子供は都合よく大人を言い負かす時に使っているのだろう。攻撃的な言葉として使われている論破であるとすればコミュニケーション力とは少し距離がある▼小学生の間でも論破ゲームが流行っていると知り知り、ネットで検索した結果「論破王AI」AIを論破するゲームがあった。試みとして数回の会話を入力した。返信がすぐに届いた。常識的なことを言葉巧みに繋いでいる。親身になって伝えてくれるように読めるが、なんとなくいい負かされたとい後味の悪さが残り素直に納得した気持ちにはなれなかった▼論破を肯定的に考えると論理的に相手に理解を求める上で役立つ。一方、相手の言い分を圧倒するとか会話を遮断する面も。深い意味がなく言い負かすことだけが目的となっていないかどうかを含めて課題がある。

(吉永 幸司)

一年生の授業開き 川部 長人

今年度、初めて小学一年生の担任をすることとなった。子どもたちと過ごす中で、一年生はとても意欲に満ち溢れているということを感じている。「国語の授業をやってみよう」と「学校探検でいろいろな場所に行ってみよう」と、日々の生活の中で「やってみよう」と思えることがたくさんある子どもたちである。そんな子どもたちと行った、国語の授業開きについて紹介する。

勤務校では光村図書の教科書を使用している。光村図書では教科書の一番初めに『はるがきた』という教材がある。文字は最後のページしかなく、初めて教材を読んだときは「これで授業をするのか」と、とても悩んだ。以前の近江の国語実践研究会で吉永先生が話されていたことを参考に授業づくりに取り組んだ。

授業の初めに「楽しそうな絵ですね。何をしているのだろう?」と聞いてみると、次々に子どもたちから発言があった。一年生の初めての授業で、挙手もなくどんどん発言するので、だれが何を言っているのかわからない状態になってしまった。ここで「授業で発表するときには、手を挙げます。先生に名前を呼ばれた人は発表します。」と手の挙げ方からの指導となった。一年生にはこういった基本的な指導も大切だと実感した。

続いて「何があるかな?」と聞いてみると、先ほど練習したように、どの子もきれいに手を挙げていた。一年生の素直さと、スポンジのように何でも吸収するすごさを感じた。子どもたちからは「クレヨン」や「カエル」など、知っている言葉がたくさん出てきた。中には「ぶどう」や「いちご」など、絵の中の子どもたちが描いている途中のものを発表する子どももおり「なぜ、ぶどうだと思ったの?」と聞いてみると、「むらさき色だからです」と色に着目した言葉が出てきた。そこから色に関わる言葉集めを行い、出てきた言葉をフラッシュカードにして、言葉から文字の指導を行っていった。

さらに、絵にはたくさん子どもたちが描かれており、「この人たちに名前はあるのかな?」と聞いてみると、想像して「あきらくん」や「みのりちゃん」「あおいさん」などいろいろな名前が出てきた。ここで「今、○○くん・○○ちゃん・○○さんなど、いろいろな呼び方が出てきたけど、どれが一番呼ばれて気持ちがいい呼び方かな?」と聞いてみると、「○○さん」と発言があり、みんなが気持ちよく過ごせるように、丁寧な言葉を使っていこうということになった。最後に絵の中の子どもたちはどんなお話をしているか話し合い、授業が終わった。

絵だけの教材であったが、子どもたちに教えること・考えることがたくさん詰まっており、教材研究の楽しさをあらためて感じた。

(湖南市立菩提寺小学校)

読み語りのすすめ 岡嶋 大輔

四年ぶりに学級担任をすることになった。学年は二年生。これまでもそうであったが、国語の授業も、どうすれば目の前の児童らが考えることを楽しむことができるか、と思いつく授業づくりをしている。

年間を通して取り組もうと考えていることのひとつが、絵本の読み語りの機会を多くとることである。

児童は、教室の前四列の机を後ろに動かし、前方に集まる。担当が、前で椅子に座って読み語りをするというものである。

読み語りをする絵本は、私が二週間に一回程度、市立図書館に行き、十数冊借りて職員室の私の机に置くようにしている。机の上に置いておくのは、学年の先生方も同様に読み語りができるようにするためである。最近、インターネット上で素敵な絵本の紹介が、こちらで見られる。絵本サークルの方のおすすすめを伺うこともある。そういった情報をもとに、二年生の児童の表情を思い浮かべながら、図書館にそれらの絵本を借りに行く。すると、気になる題名や表紙の絵本が目に入ってきて、読んでみるとこれもまた楽しい。結局、予定よりも多い絵本を借りることになる。

児童の前で実際に読み語りをしながら、適度な声の大きさや速さ

で読むというのはもちろんのことではあるが、あらためて「間」の大切さを実感している。たまたまけるように読んだり、一瞬の間をおいて児童の方を向いた後に一言つぶやいたり。読み語りをしながら、「ドキドキやためいき、怒りや大笑いといった児童の様子や表情、感情が伝わってきて、読み語りをしている方も楽しい。

四年のブランクがそう感じさせているのか、絵本の世界に没入している児童の姿がとてとても尊くみえる。普段はなかなか感情を表に出さない児童が少し笑っているだけで踊るほどうれしい。低学年のこの時期にしかない感性で、触れておいてほしい絵本がたくさんあると思う。絵本を読みながら、登場する人物を自分と重ねたり、出会ったことのない人物と出会うたり、人物にაცოგაれやちょっとした嫌悪感を持つたり。あるいは、行ったことのないような場所に行ったり、あり得ない状況に大笑いしたり、その人物の葛藤を自分ごとのように考えたり等することができる。自分や違う立場の人の気持ちを理解していくことにつながっていると感じる絵本も多い。

読み語りは、読み手の愛情を聞き手が無自覚に受け取る時間でもあると聞いたことがある。その空間が安心感を生み、学校に行く楽しみやきっかけの一助になればと思う。

(野洲市立北野小学校)

『さあ、
アップデートしよう』
井上 凜斗

今年度も二年生の担任を拝命した。男子十三名、女子十二名、計二十五名(内、交流学級在籍一名)の単学級で、昨年度と比較すると児童数は若干減少した。昨年度の同時期は、多くの業務に追われ多忙な日々を送っていたが、今年度は昨年度の経験を活かし、順調に新年度をスタートできている。

そうしたことから、今年度の自己目標を『アップデート』と設定した。昨年度の成功と失敗の両方を糧とし、子どもたちの力を一層伸ばすための指導方法を深く考察していきたいと思う。

その目標を自分の中に掲げ、国語科の指導に取り組んだ。四月から気合いの入った私は『ふきのとう(光村二年上)』の学習の言語活動を、昨年度と同じ『登場人物になりきって、音読劇をしよう』に設定した。

昨年度は、物語の授業において登場人物の気持ちの読み取りに焦点を当てすぎたため、『登場人物になりきった読み方の工夫』を十分に追求できなかったという反省があった。

この反省を踏まえ、今年度は、登場人物の気持ちの読み取りに入る前に、物語における登場人物の位置関係を整理する時間を設けた。

雪の下で踏ん張っているふきのとうがいて、その雪の上に生い茂り揺れて踊りたがっている竹やぶがあるなど、位置関係を捉える活動を取り入れた。その結果、次第に登場人物の動きや気持ちについて深く読み取る児童が増えた。

その結果、昨年度とは違う音読の工夫をする児童が出てきた。

・上を見上げながら、上にいる竹やぶに伝えるように少し大きな声で読む児童

・謝っている場面で、下を見ながら「ごめんなさい」という気持ちを含めて読む児童

・はるかぜは目に見えないと捉え、お日様も春風の居場所が分からないから「おうい」という呼びかけは大きな声で読むと工夫する児童など、多様な音読の工夫が見られました。また、文章の読み取りが苦手の児童や、音読に苦手意識を持つ児童も、「ささやいていきます」「ざんねんそう」といった情景を表す言葉を手がかりに、声の大小や強弱を意識しながら音読劇に取り組むことができた。

このように、昨年度と同じ指導を形式的に繰り返すのではなく、子どもたちの実態に合わせて、より深く読み解く力を育むために、日々の授業を『アップデート』しながら、自己研鑽に励んでいきたい。

(豊郷町立日栄小学校)

入門期の国語

―音読指導―
山田 定子

久しぶりに一年生の担任となりました。環境がかわり子ども達の様子も今までとは違い、試行錯誤を繰り返している。鉛筆の持ち方、本文を読む時の教科書の持ち方、文字を書く時の姿勢、発表の仕方など毎時間繰り返し指導し、何とか形になってきた今日この頃である。

一年生になって初めての物語文「あめですよ」を学習した。四月から「あいいうえおのうた」などで言葉の意味やリズムを表現して音読する楽しさを味わってきた。これらをもとにして、言葉と絵をつないで場面を想像しながら読むことを計画した。友だちと声をそろえて音読するのは楽しい活動の一つである。繰り返し音読していくなかで、言葉のリズムや音の響きを感じとらせたいと考えた。また動作化を取り入れることで、生き生きとした楽しい学習が展開できるだろうと考えた。「だいすき」と「きらい」の言葉の対比、「とんとんとん」「どんどんどん」と「ふうふうふう」「ぶうぶうぶう」の語感の対比など、挿絵の登場人物の表情や行動とつないで、いろんなことに気づかせ、それらを発表し交流することであると考えた。

①全文を全員で音読する。一文ずつ、読んでいく。

②本時の学習場面を視写する。まだ学習していない字については、書いておく。上からなぞることも。

③本時の場面を音読する。

④挿絵とあわせながら登場人物の様子や雨の様子を想像し発表する。

⑤まとめとして音読する。

⑥視写したノートに、絵や言葉を書く。(言葉についてはまだ充分文字が書けないので書ける範囲で、あるいは、書きたいことを話して教師が書くということにした。絵だけでもいいことにした。)はじめは、学習の仕方を説明しながら、どういうことを話したらいいのかを確認しながら進めていった。登場人物の気持ちを考えた様子や考えたりするの、音読をしながらかんがえを進めた。どんな顔で、どんな声で、どんなふうにして読めばいいかを考えてそれを言葉にしていった。学習が進むにつれ人物のつづやきや気持ちも考えられるようになり、いろんな言葉が出てきた。最後の場面では、女の子の思いや様子(かさにあたる音、水たまりにはいる長ぐつ音など)も考えられ、楽しい学習となった。

文字の読み書きに慣れていない子ども達も、声に出して音読すること、絵や言葉から場面の様子を思い浮かべることができた。これをもとにして、動作化を取り入れた音読の仕方を工夫したりしながら音読を楽しみ、読むことの基礎的な力をつけていきたいと考えている。

(東近江市立湖東第一小学校)

学級・授業づくり奮闘記

I 四月編 I

川那部 隆徳

四月より初任者研修の指導に三校を兼務し、計五名の初任者を担当している。それぞれの初任者と出会うのは、週一回である。

学級開きから一か月余り。初任者の奮闘ぶりを紹介すること、教師としての原点に立ち返りながら、教室開き、学級経営の在り方を考えたい。

聞くことの指導から

「いじめのない学級」、「互いのよさを認め合える学級」「けじめのある学級」等、これらが各々の先生たちの目指す学級像である。

その実現のために、まず、共通して、「話が聞ける子」を育てようとしているところに、頼もしさを感じた。

わかりやすい言葉で話す、項目立てて話す。短く話す。緩急をつけて話すなど、一つ一つ話す技能を身に付けていく様子に成長を感じた。

一方で、学級開きから一週間、初めて出会ったときには、すでに喉を傷めてしまっていた先生も。その発端は、静かになるのを待たせられず、少々ざわついていても話し出してしまったことにある。それが重なるうちに、意に反し、「聞かなくても許される雰囲気」を生じさせてしまったようだ。

知らず知らずのうちに教師の言動が、教室の雰囲気、秩序形成に影響をもたらすことを目の当たりにした。「凡事徹底」「細部にこそ神は宿る」などの格言が脳裏に浮かぶ。

「先生の話」の中身

学級開きから二週目に入るに前後して、係活動が動き出した。これまで教師がかけていた号令を「日直」が担うようになった。新鮮味があるのか、心なしか子どもたちの動きが機敏である。「朝の会」「帰りの会」も日直が進行役を務め出した。ざわついていて教室にシーンとした空気が漂う。

「次は、先生の話です」

「今日の〇校時に、・・・」と連絡事項が続く。次第に教室がざわついていく。「子どもは、時に天使でもあり、悪魔でもある」と何かの小説で読んだことがある。次週、訪れた際には、日直の号令と、先生の「静かに」がこだましていた。

大村はま先生が、一人一人の子どもに興味関心に合わせて話す内容を留意されていたことを思い出す。現在、朝、子どもが聞きたくするような話題を一つ取り上げ、「先生の話」の充実を図ろうとしている。

支援を要する子どもを中心に

全国的に、特別な支援を要する子どもが増加傾向にある。初任者の教室にも在籍しており、先生の隙を見ては、教室を飛び出して

く。あるいは、立ち歩くといった状態であった。ところが、三週目ごろから、机に着いている時間が伸びてきた。先生からは、

- ・一週後、すぐに席替えをした。
- ・動き出しそうになる前に声をかけている。
- ・その時々で、簡単な役割を与えるようにしている。
- ・課題を調整している。
- ・等の対応が聞かれた。脱帽。

伸びることを願って

ゴールデンウィークが過ぎ、本格的に学級づくりが始まっていく。立て直しを図っている学級では、現在、「静かに」という言葉を使わずに、子どもを静かにさせる方法を模索している。

- ・キチンとできている子どもを誉める。
- ・先生の発問、指示を明確にする。
- ・子どもの発言を先生が解釈して説明せず、問い直したり、他の子に尋ねたりする。
- ・授業に見通しを持つ。等
- ・やはり、「授業で勝負」である。

これからどんな力を子どもたちにつけていきたいかを問うたところ、ある初任者から次のような返答を得た。

「子どもにつけていきたい力というよりも、自分が変わりたいと思います。みんなが活躍できる場を作りたいです。もっと教材研究をしなければと思っています。」

(栗東市立大宝東小学校)

編集後記

▼4月例会
(五一七回)

「さざなみ国語教室」の研究について次の3点を提案・質疑・協議を行った。①へ令和6年度の成果と課題へ研究主題を「言葉による見方・考え方を高める国語科の授業」を掲げ、実践を積み上げ、言葉と言葉の関係の問い直し、国語学力を高める方法を明らかにしようとしたことである。特に、「言葉への自覚を深める」ことを個や集団の関わりを考へる機会をもつことができた。②へ令和7年度の研究目標である「国語を正確に理解し適切に表現する資質・能力の育成」をより深く考え実践すること、研究の方向に定めた。前年度の研究成果を受けて個々の学びを「適切・正確」という内容で深めようとする意図である。「適切・正確」は国語科の授業で大事にすることはもとより、社会を生きる全ての人にとつて大切な資質・能力であると考えが背景にあり、国語科の役割も含めて授業改善に向けて研究の続ける。③へ月例研究会について「令和の日本型学校教育」へ「予測不可能な時代における国語科教育」へ「自由進度学習」へ「個別最適な学び」へ「協働的な学び」へ等教育を巡る話題も多い。時代がどのように動こうとも主語は「子供」は不変である。実践を大事にしつつ新しい課題に向けての教師力を磨き高める研究会でありたい。

▼巻頭には、石川雅春先生から玉稿をいただきました。深謝。

(吉永幸司)